

小学部

小学部段階における学習評価の可能性

—活躍を通して評価場面と授業づくりを考える—

小学部段階における学習評価の可能性

－活躍を通して評価場面と授業づくりを考える－

會澤 加奈子 池田 菜緒 小島 啓治 加藤 夏奈 坂詰 健司

柴田 琢磨 仲野 真史 松本 直巳 吉田 友紀

小笠原 恵 藤野 博（東京学芸大学）

I はじめに

1. 「集会」の新設

今年度より小学部の組織改編に伴い、昨年度までの授業「みんなであくしゅ」、「つたえよう」の統合に加え、音楽的及び体育的要素を取り入れた小学部合同授業「集会」を新設した。授業のねらいとして以下の3点が挙げられる。

- 大勢の友達の中でも自分の力を発揮し、伸び伸びと活動する。
- 集団活動を通して、みんなで協力したり助けあったりする。
- さまざまな文化に触れたり、季節を感じたりして、興味関心を広げる。

「集会」のテーマは、(1)「七夕集会」「お正月集会」「6年生を送る会」といった風物詩や年中行事に親しむもの、(2)「ダンス集会」「絵本集会」といった余暇活動につながるもの、(3)「もうすぐ山登り遠足集会」「学発練習はじまるよ集会」といった行事等の事前事後学習の役割を果たすもの、の3つに大別される。小学部が目指す「教科横断的な学習の構成」の視点において、「集会」は各授業や行事をつなぐ中核的な授業であると言える。また「集会」は、学校生活に潤いやメリハリをもたらしたり、小学部集団の行動規範や価値基準を形成・共有したり、教員が学年の連続性や段階性を再認識したりする役割も備えている。

2. 活躍をキーワードとした支援方法の充実

昨年度、「他者と活動や課題を共有するなかで、自分のもっている力を十分に発揮して、他者から応援や称賛を受けること（仮説）」と捉えた「活躍」をキーワードに、児童の主體的・協働的な学びにつながる支援方法の充実を検討した。具体的には、「活躍場面記録表」を用い、「活躍場面省察会議」で、活躍に影響した要素を整理・検討することで、「活躍を生む状況づくりの分類」（「師範型」、「観客型」、「同僚型」 図1）の仮説につながり、活躍場面を設定しやすくなるという効果をもたらした。ただし、「活躍」の定義について、一定の共通理解は図られているものの、随意的に解釈しかねない側面があるという課題が残った。そこで、今年度は、最初に小学部教員全員で、「活躍」について、昨年度の実践と定義を照らし合わせ、共通理解をしてから研究に着手することとした。

師範型		大人と一対一の場面で、子どもが力を発揮して、大人から応援や称賛を受ける状況づくり
観客型		子ども対集団の場面で、子どもが力を発揮して、大人や他児からの応援や称賛を受ける状況づくり
同僚型		集団で、活動や課題を共有して一緒に取り組む場面で、大人や他児から応援や称賛を受ける状況づくり

※黒色は対象児、グレーは教員、白は他の児童を表わす

図1 活躍を生む状況づくりの分類

3. 活躍と評価

活躍が生み出されている状況において、小学部の教員は、児童の「できた」、「もっとやりたい」、「見て、見て」という気持ちを引き出し、これらを大切にしながら支援の充実を図ってきた。この3点が活躍かどうかを判断する一つの基準になっている。「できた」、「もっとやりたい」、「見て見て」が引き出されている場面を評価の側面で見直すと、自己評価や他者評価の基礎を育てていることにつながっている、つまり活躍と自己評価・他者評価と捉えている学習評価は密接に関係しているのではないかと考えた。そこで、小学部段階における自己評価の基礎は「子ども自身の確かな手応え」、他者評価の基礎は「周囲のリアクション」と定義し、活躍場面における効果的な手立ての充実を図りながら、自己評価・他者評価の在り方を検討することとした。

II 目的と方法

これまでに述べた状況を踏まえて、今年度も「活躍」をキーワードに、新設された「集会」の授業づくりをターゲットにして、以下の手続きで、小学部段階における自己評価・他者評価の可能性について考察する。

1. 「活躍場面省察会議」を通して、効果的な手立ての充実を図るとともに、小学部段階における自己評価・他者評価の在り方を検討する。
2. 一人ひとりが活躍する「集会」の授業づくりを通して、主体的・協働的な学びを育む授業づくりのポイントを作成する。

III 結果

1. 小学部段階における自己評価・他者評価の在り方

1) 自己評価・他者評価する力につながる活躍場面の実際

小学部教員が一人一事例、「活躍場面表」を用い、活躍場面省察会議や昨年度の成果の一つである「オン・ザ・フライミーティング」を通して、意見交換をしてきた。それをもとに、自己評価・他者評価する力につながる活躍場面の側面から指導や支援のポイントをまとめた。資料1～4に各事例の概要を示す。

2) 活躍の可視化

各実践事例から、「活躍の可視化」が、自己評価・他者評価する力につながる活躍場面の指導・支援の共通ポイントとして見えてきた。資料1では、食べたチャレンジ食材を記入した献立表、資料2ではアルバム、資料3では活躍場面の写真とキャッチフレーズを廊下に掲示、資料4ではがんばり表を活用し、いつでも自分の活躍を振り返りやすくすると同時に、他者から称賛してもらえる環境づくり及びその支援は、自己評価・他者評価の基礎的な力を育てる基礎になると考える。

3) 自己評価に必要な力

メタ認知の側面から自己評価に必要な力について考えた。自己評価について「育成すべき資質・能力」を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会」で参考とされた「21世紀型能力」(国立教育政策研究所、2012)で、「モニター力」、「コントロール力」について以下のように述べられている。

- ・モニター力：自分自身の課題をモニターし、問題を見付ける
- ・コントロール力：学習の状況を調整する

特別支援教育でそのまま取り入れることは難しいため、解釈し手立てを講じる必要がある。各事例を通して小学部での解釈とその主な教員の手立てを表1で示す。

表1 自己評価に必要な力

自己評価に必要な力	主な教員の手立て
モニター力	<ul style="list-style-type: none"> ・児童を実態把握した上で、手本や写真などの視覚的教材を使って課題理解を促す ・手続きや手順、方法の具体的な提示 ・評価基準の明確化
	例) ・数取り器等の支援具の活用 ・それぞれの活躍にキャッチフレーズ ・活躍場面の可視化 <div style="text-align: right;">等</div>
コントロール力	<ul style="list-style-type: none"> ・課題解決の支援（教員の援助、ツールの活用、周囲の応援）
	例) ・がんばり表の活用 ・周囲の教員や友達、保護者の称賛 <div style="text-align: right;">等</div>

メタ認知の側面から実践事例におけるモニター力やコントロール力を身に付けるための工夫や手立てを整理したが、それだけでなく活躍場面においては、自己評価するモチベーションや自分の力を発揮したいと思える集団づくりも大切であり、そのことにより児童の「できた」という達成感、喜びを他者と共有したいという気持ちを引き出すのではないかと考える。

4) コミュニケーションの発達と活躍場面における評価の発達

これまでの実践と研究協議会の分科会での協議を通して、コミュニケーションの発達と活躍場面における評価の発達について考えた。コミュニケーションの発達段階（ベイツとボルテラ（1975））を参考に小学部の独自の解釈を加えて類推される評価の発達を表2に示す。

表2 コミュニケーション発達段階から類推される評価の発達

コミュニケーションの発達理論	活躍場面の実践を通して類推される評価の発達
①聞き手発達段階 ・非意図的／未分化な自己感	①やったことを誉められる ・事後的に認められて嬉しい
②意図的伝達段階 ・非言語的／身近な大人の役割大	②「できた」「見て見て」 ・先んじて認められたい 価値、規範の共有
③言語段階 ・意味理解の明示／自律性増大	③この基準が達成できたよ ・具体的基準の自覚
④（言語的思考段階） ・内的対話	④自己評価 ・内なる他者の視点での客観的評価

小学部段階における自己評価・他者評価とは、認めてくれる相手、つまり自分の「できた」と感じる行為にリアクション（意味を与え、映し出す）をしてくれる相手との協働が不可欠な段階であり、「できた」と感じる（自己評価）と他者から認められること（他者評価）は未分化な段階であると考え。しかし、他者（特に大人から）褒められるだけでは、他者依存から抜け出せず、自律的な評価につながらない。自他未分化な活躍という状況から自己評価・相互評価に至る育ちの中に、課題設定の重要性、観客型・同僚型の活躍、役割意識の重要性が位置付けられるのではないかと考える。これらを受けて、

師範型・観客型・同僚型と評価の発達のプロセスとの関係を図2に示す。

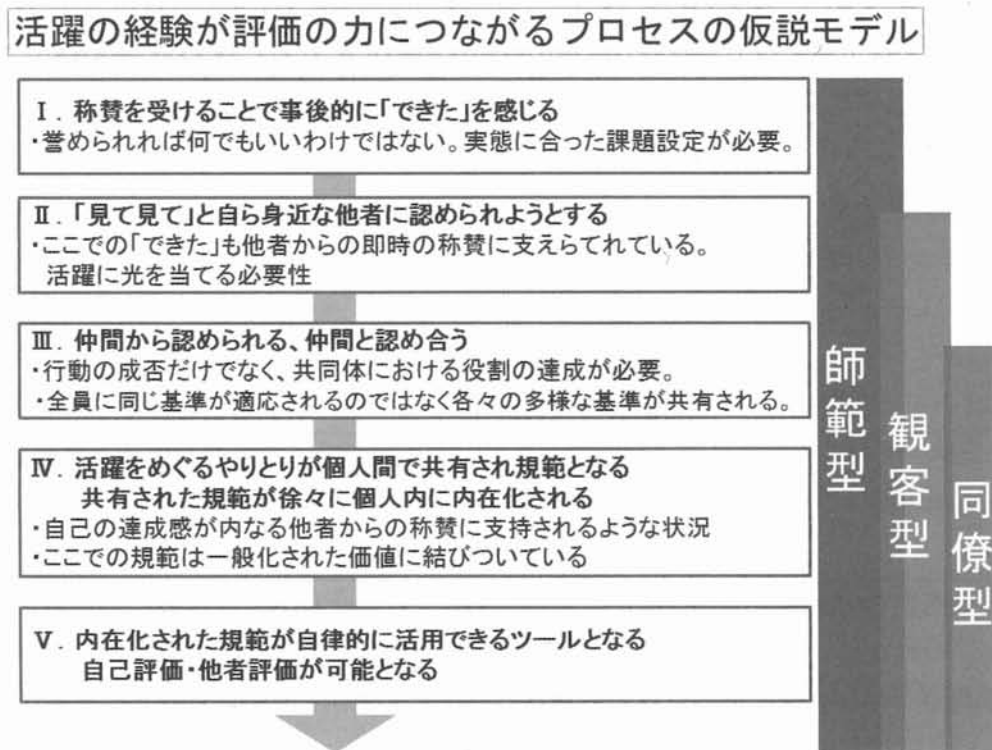


図2 活躍の経験が評価に力につながるプロセスの仮説モデル

事例① 称賛のシャワーで A 児の「食べた！」を引き出す取組

対象： ほし組 1 年 A 児

活躍を生む状況づくりの分類： 師範型

【 A 児の実態 】

偏食やこだわりが強く、4月当初は、白米、パン、肉、一部の魚、牛乳、デザートしか口にできなかった。これらの食材は、概ねフォークやスプーンを使って食べることができる。苦手な食材（以下：チャレンジ食材）を口にすると、えすくことが多い。そこで、スプーンにつけたみそ汁を口にすることから始めた。指導を重ねることに、チャレンジ食材も食べようとする気持ちが育ってきている。チャレンジ食材については、基本的に、1センチ角程度の大きさにし、教員がスプーンまたはフォークで口に運んでいる。

【 指導・支援のポイント 】

指導当初は、本人にとって、かなりハードルが高いため、反応を観察しながら、給食の時間が嫌にならないように配慮した。雰囲気慣れてきてから、チャレンジ食材を1センチ角に切り、好きな食材→チャレンジ食材→好きな食材と交互に食べ進めるようにした。チャレンジ食材は1個から始め、様子を見ながら食材の個数を増やしていった。

(1) 即時に本人の頑張りを称賛

- チャレンジ食材を食べたときには、担当教員は、ハイタッチや頭をなでるなど大げさに褒めて、本人の頑張りを認める。
- 周囲の教員も拍手を送ったり、本人に頑張りを称賛したりすることで見守っていることを伝えるようにする。

(2) 家庭でも本人の頑張りを称賛

- その月の献立表を連絡帳に綴じ、チャレンジ食材を食べるたびに記入していく。それを家庭に持ち帰り、保護者には、本人と一緒に眺めながら、おいしかった食材やまた食べたい食材を聞き取ってもらったり、チャレンジ食材を食べたことを称賛してもらったりする。
- 前の月までの献立表は、学級で使用しているアルバム（事例②参照）に綴じ、いつでも本人が見られる状態にしておく。

(3) 前向きに取り組める配慮

- 食材を口に運ぶ際、本人が気持ちの準備をして口を開けるまで待つようにする。また周囲の教員も A 児の様子を見守り、応援することで頑張る気持ちを引き出す。
- 好きな食材→チャレンジ食材→好きな食材と交互にすることで、食べることへのモチベーションを維持する。
- 終わりが分かるように、あらかじめ食べる物の総量を提示する。



【 活躍の姿や成果等 】

時 期	活躍の姿や成果等
1 学期前半	<ul style="list-style-type: none"> ・ 頑なに拒んだり、泣いたりすることが多かったが、給食の雰囲気に慣れてくると、教員の働きかけに応じるようになってきた。そして、周りの教員の応援を受けて、「〇〇（自分の名前）、頑張る！」と自分自身を奮い立たせてチャレンジ食材を口にするようになってきた。
1 学期後半 ～ 2 学期	<ul style="list-style-type: none"> ・ チャレンジ食材を食べて称賛されることが増えてくると、チャレンジ食材を口にするまでの時間が短くなり、また食べる個数も増えてきた。本人も達成感を覚え、食べ終わると「食べた！」と担当教員に口を開けてアピールするようになってきた。 ・ 周囲の教員の応援を励みにするようになり、チャレンジ食材を食べる前に、「頑張れ、頑張れ、〇〇（自分の名前）、あ〜ん」と周囲の教員に催促するようになった。 ・ チャレンジ食材を食べた後、献立表に記入される様子を覗き込んだり、毎朝、連絡帳を提出する際にも、わざわざ連絡帳を開き、記入された献立表をじっくり見たりと、献立表が、実績の確認や励みとなるツールとなっている。
3 学期	<ul style="list-style-type: none"> ・ 出された食材は、ほぼ自分で、フォークやスプーンで口に入れて食べるようになってきている。 ・ また前月までの献立表を綴じたアルバムも給食の準備時間にじっくり見ている。

【 まとめ 】

- 教員や保護者からの称賛を繰り返しが、チャレンジ食材を食べることで何をすれば褒められるかが分かり、周囲の期待に応えたいという気持ちを引き出すことにつながったと考える。→周囲が評価基準を作り上げる。
- 苦手だが、周囲の期待に応えたいという葛藤を乗り越えた実感したからこそ、「食べた！」と自分の頑張りを称賛する言葉が出たのではないかと考える。
- 献立表へ記入することは、単に教員にとっての記録や保護者への報告だけでなく、A 児にとって実績を確認でき、給食へのモチベーションを高めるツールになったと考えられる。

事例② 「見て見て」を引き出すアルバムづくりの取組 -自己意識と共感性を育むことを目指して-

対象： ほし組 1・2年 5名

活躍を生む状況づくりの分類： 師範型・同僚型

【 ほし組の実態 】

小学部1、2年生5名が在籍している。児童の多くは幼稚園の頃にタブレット端末を用いて自分の経験や行為を振り返る「思い出遊び」や、家庭と写真・動画を共有する「連楽帳」の取組を経験している（資料参照）。経験したことや楽しかったことなどについて、大人の問いかけに応じて笑顔になったり質問されると答えようとしたりする児童が多いが、年度当初、自分から大人に経験したこと等を伝えようとすることは少なかった。過去の経験を振り返ったり、積極的に他者と話題を共有して共感や称賛を求めたりする態度を育みたいところである。

参考資料）東京学芸大学附属特別支援学校研究紀要(2016) No.60

【 「見て見て」を引き出すポイント 】

(1) 学習の様子を収めたプリントを毎週金曜日にファイリング

- アルバムに入れるプリントは毎週金曜日に配布している。プリントにはその週に行った学習や生活の様子を収めており、ひらがなが読める児童が振り返りやすいよう簡潔な言葉を添えている。
- 1週間の学習の様子を見て振り返ったり、楽しかった学習や印象に残ったことについて発表したりする機会を設けている。
- 写真を見てつづやく、写真を指さしたり見つめたりするなど、アルバムに関する児童の言動を丁寧に拾い、共感的に接するようにしている。

(2) 学校での出来事を家庭と共有

- 毎日持ち帰ることで、学校の出来事について家族との会話を充実させるツールの一つとして活用を促した。
- 学習に関連した教材、家族との外出先のパンフレットなど、「誰かに見せたい」と感じたら成果物も児童の気持ちを汲んでアルバムに挟んだ。
- 長期休み際には、①休み中の写真を「夏(冬)休みの思い出」のプリントに貼って、休み明けに学校に持参すること、②親戚の家等にもアルバムを持参して学校での出来事について話題にするとともに「アルバムコメントシート」に家族や親戚の方の感想を記入することを保護者に依頼した。①の「夏(冬)休みの思い出」プリントは、長期休み後の授業で紹介して家庭での出来事を学校の教員や友達とも共有できるようにした。

(3) 毎日決まった時間にアルバムを開き、眺める機会を設ける

- 安全管理上、やむを得ず児童がただ待つだけとなっていた時間に、アルバムを開いて眺めたり、写真をもとに話をしたりするよう促したことがきっかけとなり、給食準備中をアルバムの時間とすることにした。



【 成果とまとめ 】

- まず自らアルバムを出して眺める姿やアルバムの更新を楽しみにする姿が見られるようになった。最近では、過去の学習の写真を指さしてじっと見たり、近くの大人に共感や称賛を求める視線を送ったりする様子が見られるとともに、アルバムを通じて他者と話題を共有できた時に笑顔を見せることも多くなった。
- 連絡帳やコメントシートによると、アルバムが更新される日には家庭に帰ってすぐにランドセルからアルバムを出して眺めたり、家で家族との話題の共有に役立てたりする姿が見られている。
- ほし組では図画工作で作った作品や給食で完食して空になった皿など、様々な場面で周囲の人に「見て見て」と成果物を見せ、称賛を受ける雰囲気大切にしており、こうした取組もアルバムを介して自分のイメージを人に伝えようとする気持ちを育むことにつながったのではないかと考える。
- 写真を眺めて過去の経験を振り返ることが児童の自己意識を育む一助となり、アルバムづくりを含め児童が「見て見て」と周囲の人に共感や称賛を求める姿を積極的に認めていく取組を続けることが、主体的に学ぶ意欲を高めることにつながると考える。

休み中、時々アルバムを出してきて、友達や先生のことを思い出していました。毎週1枚増えるのを楽しみにしており、これまでのことを振り返って写真を指さしていました。写真を通して、学校の様子が分かり助かります。兄弟がアルバムを見て、E児に話しかける機会も増えていきます。



保護者の感想(コメントシートより)

よくお風呂で学校での出来事について質問すると、一生懸命答えてくれるが理解するのが難しく、B児も「違う!」と言ってお互い理解できないまま会話が終わることがよくあります。アルバムで得た情報をもとに「プールで泳いだの?」と話しかけると、泳いでいる様子を実演してくれるといったように、アルバム更新から始まる父と子の会話は、一方通行でなく実演付きの会話のキャッチボールが成立しているように思えます。アルバムは、お風呂の終了とともに相互理解のままだま話を終えることに苦しんでいた父親を助けてくれるアイテムです。

.....アルバムの作成例.....

★学習で使用した教材や作品などの画像を載せることもある。



★簡潔な文章を添えて、振り返りにも役立っている。

★学習の様子を収めたプリントは毎回、児童それぞれがメインで映っている写真を一枚以上載せることを目指している。

.....冬休みの思い出.....



★写真について保護者に一言添えてもらい、情報をもとに学校で経験を共有できるようにした。

★休み中の写真を2枚程度貼り、休み明けに提出するよう保護者に依頼。教員から一言を添えた後、アルバムに挟むよう促した。

事例③「春のレクリエーション大会」みんなの活躍を見つけよう！

対象： そら組 3・4年 6名

活躍を生む状況づくりの分類： 師範型・観客型→同僚型

【 そら組の実態 】

本授業は「春のレクリエーション大会（通称：春レク）」前の学級の時間に行った。「春レク」は、5月に全校で行われる体育的行事である。「春レク」前の時期は、体育での競技練習、図画工作でのクラスの旗作りなど、関連する授業をほぼ毎日行うため、新しいクラスの友達との関係性を深める良い機会となっている。そら組は低学年の頃から同じメンバーで過ごしていたこともあり、年度当初から仲の良いクラスであった。長い文を含むことばでやりとりできる児童から、サインやジェスチャーを併用してコミュニケーションを行う児童まで、発達段階やコミュニケーションの取り方は様々であるが、友達同士で応援し合う姿もみられていた。ただし、友達が具体的に何を頑張っているのかなどを含めて、認め合ったり、励ましたりすることは少なかった。また、競技などの目立つ活躍は注目されやすい一方で、注目されにくいところで頑張っている児童もいた。そこで「春レク」本番前に一人一人の活躍を認め合う機会をもつために本授業を設定した。

【 指導・支援のポイント 】

(1) 日々の頑張りにスポットライトを当てなおす

- それぞれの活躍場면을教室の中で再演することで、自分の活躍が称賛される舞台、友達の活躍をみんなで称賛する舞台を設定した。
- 写真を見せながら「次はだれ？」「〇〇くんはなにをがんばっている？」と発問し、友達の活躍やその具体的な内容に注目を促した。
- 日々の練習中にもそれぞれの頑張るポイントを応援・称賛し、本人にも周りの友達にもそれが意識されやすいようにした。その上で、練習中に光の当たりにくかった場面も含めて本授業でスポットライトをあて、その後の練習や本番で互いの活躍を認め合えるように促した。

日々の練習での称賛

本授業

本授業を踏まえた認め合い
自分の目標へのやる気アップ！

本授業のながれ

- ①モニターに児童の活躍場面の写真を提示
 - ②「Aさんは何を頑張ってるかな？」と発問
 - ③教員からの評価 例「Aさんは体操を頑張ってるんです。腕が伸びてかっこいい！」
 - ④それぞれの活躍をその場で再演 例「Aさんが前にでて、皆と一緒に体操をする。皆でAさんを称賛する」
- ※上記①～④の流れを一人ずつ行う。

(2) それぞれの活躍を名付ける

- それぞれの活躍に「体操名人」「韋駄天」「アートディレクター」「掛け声リーダー」「応援名人」「行進リーダー」というキャッチフレーズをつけた。各児童の実態に合わせて、本人に分かりやすいことばや新奇で言いたくなりそうなことばを選定した。児童によっては自分でキャッチフレーズを選ぶようにした。
- 「春レク」という共通のテーマに向けて頑張っている中で、6人それぞれの活躍を示すことで、「一緒に頑張る仲間」に「一人ひとり異なる目標や得意なことがあるんだ」ということを示した。



(3) 活躍場면을掲示して可視化する

- 活躍場面の写真をキャッチフレーズと並べて廊下に掲示し、他クラスの友達にも見えるようにした。また他クラスの教員や来校した保護者からも評価を受けやすいようにした。
- 学級だよりにも、活躍場面の写真とキャッチフレーズを掲載し、保護者との間で共有できるようにした。

【 活躍の姿や成果等 】

- 教員が「さすが〇〇さんは体操名人だね」とキャッチフレーズを使って褒めることで、児童同士でもそのフレーズを使うことがみられた。特に本授業前にはあまり注目されていなかった場面についても、児童同士で認め合う発言がみられるようになった。発語が難しい児童も、キャッチフレーズで応援されたり、褒められたりすることで、よりやる気をだして頑張る様子がみられた。
- 「ぼくは掛け声リーダーだけど、〇〇さんは応援名人、〇〇さんは体操が上手」など、自分と友達の違いにポジティブに言及する様子がみられた。また「〇〇くんが韋駄天だけど、僕も速いんだよ」など、友達の活躍にライバル意識をもって自分も頑張ろうとする児童もいた。
- 発語の難しい児童も、自分の活躍場面の写真を指さして、教員にアピールする様子がみられた。また、保護者が来校した際に、廊下の掲示を指さして「僕は韋駄天です。そして〇〇さんは掛け声リーダー、〇〇さんは体操名人です」と自発的に自分や友達の活躍を紹介する児童もいた。

【 まとめ 】

教員がその場で称賛するだけでなく、それぞれの活躍にスポットライトを当てなおし、キャッチフレーズをつけたり、みんなの前で再演し称賛し合う場面を設けたりすることで、友達の活躍を互いに意識し合うことができた。また掲示等を有効に活用することで、他のクラスの教員や保護者とも共有し、それぞれの活躍を認められる機会を広げることができた。これらを踏まえて、各児童が「春レク」の活動やそこでの自分の目標により意欲的に取り組むことができた。こうした経験を積み重ねていくことが、自発的な自己評価や相互評価につながっていくと考える。

事例④ M児の持久走における、本人の手応えを大切にした段階的な支援

対象： うみ組 5年 M児

活躍を生む状況づくりの分類： 師範型→観客型→同僚型

【 M児の実態 】

うみ組（高学年）とそら組（中学年）は、合同で毎朝 10 分間の「マラソン」に取り組んでいる。M児は、昨年度（H28）当初、その時の気分や、周りの友達や教員の反応に左右されながら、歩いたり走ったりを繰り返していた。走り始めても、約 60m のコースを一周は続かなかった。原因としては、まず走る経験が十分でなく、腕を伸ばしたまま前傾するようなフォームであった。故に、全身持久力も十分に備わっていなかった。また、意欲・態度の面では、楽しいことやできることは進んで取り組むが、集中力の持続や我慢・忍耐を要する課題には、モチベーションを上げるための支援を多く要した。今年度（H29）は、個別教育計画に「めあてを持って活動に取り組み、集中力を持続する。」という長期目標を掲げ、主な指導場面に「マラソン」を設定している。またM児は、とても明るい性格で、自分から友達や教員と関わりをもとうとする。日常生活では、友達とおしゃべりをしたり、手伝いをしたりする姿が頻繁に見られる。特にM児には、周りの友達集団を、手掛かり・見本・競争相手として、いかに指導の手だてとして活用するかが重要である。

【 指導・支援のポイント 】

◆第Ⅰ期（2016 年 11 月～2017 年 3 月）

できることを堂々と発揮するためのワークシステム



図1

- 目標周回数分の丸型マグネットを、ボードに貼ってスタート地点に設置した。マグネットを1個ずつ持って走り、半周地点にあるバケツにマグネットを入れ、残り半周は歩くこととした。（図1）
- 体力的にも時間的にも余裕をもって達成できる周回数から始め、自信をつけることに支援の重点を置いた。
- 歩く区間では、歩くように伝えても後ろめたさを感じている様子だったので、腕を振って元気に行進をするように課題を設定した。

知らず知らずにスキルアップ

- 上記のシステムが定着したところで、走る区間を2、3m程度ずつ伸ばしていった。本人が気にならない程度に課題を上げていくことで、抵抗感をもたずに、じつくりと自己効力感を高めることをねらった。

自己記録

- 児童の実態に合わせた「がんばり表」（図2）への記録を導入した。マグネットの黄色をイメージして、周回数分の丸印を黄色のペンでなぞり、数字も記入した。

◆第Ⅱ期（2017 年 4 月～2017 年 5 月）

本人の意志を尊重した支援具の活用

- 丁度この時期の課題は、マグネットの操作のために足を止める数秒間を、どのように解消していくかであった。
- M児は、教室からマグネット等の支援具の代わりに、手持ち型数取り器（図3）をこっそり持ってグラウンドに出たことが二度続いた。数取り器は、M児が最も高い関心を示す級友2名が使用していたものと同様であり、尋ねると「〇〇君と同じがいい。」という気持ちが分かった。この日から、マグネットの代わりに、数取り器による周回数のカウントに切り替えた。

◆第Ⅲ期（2017 年 6 月～現在）

リーダーとしての役割意識

- ペース配分に課題がある4年生の後輩2名がいた。そこで、M児を先頭に抜擢し、3名で列を組んでの集団走を導入した。1周回ごとに、M児が数取り器を押し、それを合図に後ろの2名が「肩ポン」と言いながら前の者の肩をタップするという方法であった。

仲間意識・競争意識

- 走った直後は円陣を組んで、M児が他の2名に数取り器を見せながら周回数を伝えたり、称賛し合ったりする場面を設定した。
- 終わりの挨拶後や、「がんばり表」への記入後などのタイミングで、児童同士で周回数を教え合ったり、称賛し合ったりするような対話場面がもてるように、教員の関わり方・支援の仕方を工夫した。

【 まとめ 】

- 数取り器等の支援具を用いて自己モニタリングする力、「がんばり表」を用いて自己記録する力を培うことができた。
- 自分の取組に確かな実感をもつことと、他者からの眼差しや称賛を強く感じることの繰り返しが、進んで学習に取り組む態度を涵養し、同時に自己評価・他者評価をのちに可能にする素地になることを期待する。

【 活躍の姿や成果等 】



図2

図3

- 課題が明確になり、意欲が増し、以前と比べ活動中の表情にも変化が見られた。その結果、着実に体力や学習に向かう態度が向上した。
- 走る区間を徐々に伸ばしていったことで、丸々一周走り切れるようになった。10分以内で約10周走ることができた。
- 取組の結果が分かりやすいため、即時的に教員や友達からのポジティブな眼差しや表情、称賛の声を受けることができた。
- マラソン直後の「がんばり表」への記録が習慣付いた。
- 数取り器の操作に関して不安な点はあったが、本人の意志を尊重した結果、教員の想定をはるかに上回る取組を見せた。全く立ち止まったり歩いたりせずに10分間走り切ることができるようになった。
- M児のお世話好きの性格が効を奏し、責任感をもってリーダーとしての役割を果たすことができた。後輩2名も頼りにしている様子で、M児も応えようと張り切っていた。
- よい記録が出た時は、自分から様々な友達や教員に喜んで伝えるようになった。
- コンスタントに22周前後走れるようになった。

2. 主体的・協働的な学びを育む授業づくりのポイント

研究方法2では、一人ひとりが活躍する「集会」の授業づくりを通して、主体的・協働的な学びを育む授業づくりのポイントの作成を行った。学部会で授業の概要を全教員で共通理解したのちに、授業実践、事後に学部会、または学部の研究日に授業を振り返り、成果と課題を共有し、次時につなげるようにした。実践のいくつかは、主体的・協働的な学びの視点から成果と課題を記録として蓄積していった。

（「集会」授業実践紹介：資料5～10に概要を示す）また11月には、学部で、集会「もうすぐ『おみせをひらこう』集会」の授業研究会を行った。これまでの実践成果を活かし、一人ひとりに応じたバリエーションに富んだ発表方法を設定し、これが効果的であった。この成果は、研究協議会当日の授業「学発練習はじまるよ集会」にも反映されている。「集会」授業実践紹介及び各授業の振り返りからの成果、活躍場面省察会議、授業研究会等を受けて集会における授業づくりのポイントを作成した。表3に示す。

表3 集会における授業づくりのポイント

<p>◆役割分担の設定（役割意識）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・会の運営（司会、あいさつなど） ・活動のモデル ・見ている側にも役割がある→教員の働きかけも変化 	<p>◆自分の力を発揮したいと思う集団づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・称賛を受けることで、結果が適切であることと存在、価値の肯定、周囲に受け入れられたという安心を得られる
<p>◆児童が分かる環境設定</p> <ul style="list-style-type: none"> ・マット等による視覚的な手掛かり ・映像や画像、絵本を用いた導入とその後の実体験の組合せ 	<p>◆児童の集中力を持続させることに効果的な工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・見る活動、体を動かす活動のバリエーションや順序の工夫 ・児童が移動することで場面を切り替える設定
<p>◆発表のフォーマット</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発表順を上級生から下級生へ ・発表用ステージの設置 	<ul style="list-style-type: none"> ・待機場所からステージまでの動線 ・発表の仕方【一人ずつ】注目（発表する側）、見通し（発表を見る側） 【クラス単位】緊張の軽減

またポイントとして整理されたわけではないが、キーワードとして挙げられたものを表4で示す。

表4 活躍場面省察会議、授業づくり等で出てきたキーワード

「やった」「もっとやりたい」「見て見て」を引き出す要素	<p>■価値の共有 ■内在化・内面化 ■「またやりたい」「もっとやりたい」「じょうずになりたい」 ■目標を本人にどう理解させるか ■評価基準を目に見える形で ■評価基準があることで友達を評価できる ■発語の無い児童との対話の手掛かり ■自分から手に取れる（活用できる）物・支援具 ■愛着のあるもの ■伝えたいことがまとまっている成果物等 ■多様な角度から見える活躍 ■引っ張られる ■お互いの課題がうまく合致 ■小まめに課題アップ、長いとだれる ■繰り返しの学習 ■お互いを合える位置 ■教員だけでなく友達も手掛かりに ■期待感をもって取り組める時間帯が毎日ある ■すぐ手に取れる ■同じ目標に向かいつつそれぞれの得意なことを発揮できる ■「〇〇名人」ネーミング重要 ■肌で感じる ■ドヤ顔</p>
支援方法	<p>■注目を集める、注意を引く、気を引く ■興味を引く、関心を引く、好奇心をそそる ■伝えるトークとつなぐトーク ■何？ なぜ？ なるほど！ ■そうそう！ ちが～う！ ■「ワクワク」「そわそわ」と「驚き・満足」の繰り返し ■「何が出るのかなあ～？」勿体ぶりテク、焦らしテク ■視覚的な支援 ■実物・文字・イメージの併用 ■教材の大きさ・見やすさ ■使い方が限定される教材と、使い回しがきく教材 ■児童が操作できるパネル ■ただ黙って聞く時間を抑える（実態に応じて） ■身体活動を伴うことで理解を促進 ■「見る、待つ」時間が無駄なわけではない ■真剣みを出す、本気を出させる ■チャレンジングな課題 ■心地よい集団 ■何か起きそうな、ワクワクするような場の設定 ■教科横断的な学習の構成 ■学校生活すべてが学習の場 ■生活で、他の授業で使っているモノやシステムの活用、また集会から他への活用 ■教材準備・場の設定および片付けも児童と一緒に ■実生活とのつながり・結びつき ■自分の意志・判断 ■自分から動き出す・行動を起こす ■状況を見る ■課題理解 ■活動の見通し ■結果の明確さ・分かりやすさ ■行動随伴性 ■モデリング ■緊張の緩和、心強さ ■落ち着き・自信・安心 ■目標意識・目的意識 ■コミュニケーションモード ■自己主張 ■自己主張できる相手、雰囲気や機会の保障 ■自己肯定感 ■体験的・経験的な活動 ■失敗もあり、失敗から学ぶ ■反復学習で基礎的・基本的な知識・技能の習得 ■内容や実態に応じた展開の順序（・まず体験・経験で興味・関心を引き出してから机上の学習・机上の学習でイメージをもったり、理解・整理をしたりしてから体験・経験・ピアモデルを参考にして（同時・直後）、体験・経験）</p>
集団の大切さ	<p>■役割意識 ■規範意識 ■価値観、伝統・文化 ■判断基準、評価基準 ■課題理解・課題の共有 ■仲間意識 ■集団への帰属意識 ■モデリング ■協力 ■特別な存在 ■問題解決能力 ■自己有用感 ■アサーション ■安心感・心強さ ■立場の認識・尊重</p>
自己評価・他者評価する力	<p>■セルフマネジメント（目標設定、自己教示、自己モニタリング、自己記録、自己評価、自己強化） ■セルフコントロール（「する」コントロール 「しない」コントロール） ■モニター力とコントロール力 ■感じる評価 ■埋め込まれた評価 ■学習の内側にある評価 ■自己評価は他者評価に囲まれる中で起きる</p>

「集会」授業実践紹介① 「音楽集会」

実施日時：平成 29 年 5 月 10 日 11:00～11:45 (45 分)

対象児童：小学部 1～6 年 17 名

【 本時の目標 】

- (1) 様々な音楽に触れ、歌ったり、体を動かしたり、鑑賞したりすることを楽しむ。
- (2) 音楽を媒介として、友達と触れ合ったり、やりとりをしたりする経験を積む。
- (3) 自分から進んで友達に関わろうとしたり、協力して楽しもうとしたりする態度を養う。

【 学習活動 】	【 指導内容 】	【 主体的・協働的な学びにつながる主な手立て 】
*児童向けプログラムの表記 ● 「こんにちは」	● 授業の始まりを意識する。 ● 音楽に合わせて、挨拶ができる。	● 「高学年音楽」の冒頭で取り組んでいるプログラムである。 ● 海組から下級生への順で一人ずつ進める。ピアノ伴奏者である MT が、児童の実態やその場での児童の集中力、緊張などを考慮して、呼名する順序を工夫する。
● 「あたま かた ひざ あし と て」	● 歌詞に合わせて、体の部位に触れることを楽しむ。	● 「低学年音楽」で定番のプログラムである。 ● 児童の実態に合わせて、モデリング、言葉掛け、身体援助などできっかけをつくり、自発的な行動を促す。
● 「あくしゅで こんにちは」	● 自分から相手を探そうとしたり、誘ったり誘いを受け入れたりする。 ● 音楽に合わせて、握手や挨拶をする。	● ピアノ演奏に合わせながら、二人組をつくり、向かい合って握手や簡単な振付を行う。 ● 見学に来た保護者数名にも参加をお願いする。 ● 児童の自発的な行動を尊重しながら、自分から相手を誘うことが難しい児童には、交友関係やその場での児童の視線などを考慮してペアを組むための支援をする。
● 「ともだちさんか」	● ピアノの音に注意を向ける。 ● 周囲の友達の様子に目を向けて、友達を誘ったり誘いを受け入れたりする。 ● 友達と協力しながら、音楽に合わせて体を動かすことを楽しむ。	● 見本として海組だけで行ったのち、全員で行う。保護者にも参加してもらう。 ● ピアノで鳴らした音の数を聞いて、その人数で手をつないで輪をつくる。手をつないだまま、左右に回る。3人から始め、数回行って最後は全員で輪をつくる。 ● 児童の様子をよく観察しながら、各自の実態に合わせて「いれて」「やろう」など声の掛け方や、手のつなぎ方などの具体的な関わり方を支援する。
● だんす	● 教員の模範演技に注目し、ダンスに関心をもつ。 ● モデルを見ながら、簡単な振付を模倣する。 ● ペアで合わせながら踊ることを楽しむ。	● まず、男性教員 1 名と社交ダンスの経験がある女性教員 1 名がペアでダンスを披露する。本格的な衣装を着用する。 ● 模範演技後、男子のみイスから立って、女子を誘うように促す。実態に応じて、誘い方の支援をする。 ● 教員ペアがサイドステップ、ターン、スピンなど簡素化した動きを示範しながら、一斉に踊る。
● おとを きこう	● トロンボーンについて知る。 ● 楽器の音色や演奏に耳を傾け、関心をもつ。	● トロンボーンの実験がある音楽の教員が担当する。 ● オリジナル紙芝居「くまきくんの なんのおと？」を進める中で、生活の中にある音や馴染みの曲をトロンボーンで奏でる。
● 「さようなら」	● 授業の終わりを意識する。	● 全員で輪になり、ゆっくり優しく歌うことで、落ち着いた態度で授業を終われるようにする。



【 成果と課題（主体的・協働的な学びの視点から） 】

- 音楽を媒介とすることで、楽しみながら自然な形で、友達を身近に感じたり、進んで関わりをもったりすることができた。緩急や強弱をつけた活動の組み方や、練習を重ねなくてもすぐにできたり、興味をもてたりする音楽や歌、動きの組み合わせが有効であった。
- 保護者の参加により、児童にとって、友達や教員とは違った関わり方のバリエーションができた。
- 児童の興味・関心を広げ、情操を育てる意味で、確かな技術をもった身近な教員が、目の前でダンスや楽器の演奏を披露することは有効であろう。また、担当した 3 名は、4 月に着任したばかりの教員だったので、自己 PR になり、児童との距離を縮める効果もあった。
- 児童の気持ちや活動の文脈を大切に「集会」を可能にするためには、教員一人ひとりが、担当の児童や目先の役割だけにとらわれずに、全対象児ばかりでなく全教員の視線、一挙手一投足を逃すまいとする意識とスキルが必要であろう。

「集会」授業実践紹介② 「プールはじまるよ集会」

実施日時：平成 29 年 6 月 28 日 11:00～11:45 (45 分)

対象児童：小学部 1～6 年 17 名

【 本時の目標 】

- (1) プール期間が始まることを意識し、自分が所属する活動グループやプールでの約束について理解を深める。
- (2) 教員の話をよく聞いたり、友達の様子を手掛かりにしたりしながら、大きな集団の中で、場に応じた行動をとる。
- (3) プールでの活動のイメージを膨らませながら、進んで活動に取り組み、プールへの期待感を高める。

【 学習活動 】	【 指導内容 】	【 主体的・協働的な学びにつながる主な手立て 】
● 挨拶をする。	● MT に注目する意識や一体感を高める。	● 模倣遊びを通して、MT への注目を高めるとともに、適切な姿勢への意識を促す。
● 絵本「ねずみのかいすいよく」を鑑賞する。	● 大きな集団の中でも適切な態度で MT に注目し、お話を傾ける。 ● プールでの楽しいイメージを共有し、これからプール期間が始まることを意識する。	● 大型絵本を使用する。 ● 絵本からの距離や一体感を考慮し、低学年はマット、その後方に高学年はイスを使用するように配置する。 ● ストーリーの中で、児童と一緒にネズミの数を数えたり、他にどのような動物がいるのかを尋ねたりして、児童参加型の読み聞かせになるように工夫する。 ● ネズミ達が楽しく泳いでいる場面を中心に抜粋して読み聞かせ、プールへの期待感を高めることに焦点を当てる。
● 昨年度の取り組みの画像を見る。	● 昨年度の取り組みを思い出し、活動の見通しをもつ。	● 画像に誰が写っているのか、何をしているところなのかなどの発問をしながら、児童の発言を引き出す。
● オリンピック競泳の動画を視聴する。	● 憧れや目標意識が芽生える。	● 大型スクリーンを使用して臨場感を出す。 ● 日本代表がリレーでメダルを獲得したレースの動画を用いる。
● 今年度の活動グループに分かれる。	● 自分が所属するグループが分かる。	● 先にグループの担当教員を紹介し、グループごとに児童の名前を呼び、担当教員の所に集まるようにする。
● 実際のプールでの導入部の活動をやってみる。 ①バタ足 ②水掛け ③入水 ④「さんぽ」	● 実際のプールでの活動に見通しをもつ。 ● グループの教員や友達と一緒に、バタ足等の運動を行う。	● 課題別に「べんぎん」「らっこ」「いるか」の 3 グループを設定する。 ● ベンチやブルーシートを用いて、プールに見立てた環境を設定し、児童の想像力を膨らます。 ● 遊戯「さんぽ」は、水の中で手をつなぐ、前後左右に歩く、潜るなどの基本的な動きで構成する。
● プールの「約束」を確認する。 ①おさない ②かけない ③とびこまない	● 海やプールでの危険について知る。 ● プールでの約束が分かる。	● 絵本の続き(ネズミのお父さんが海に流されてしまう場面)を読み聞かせ、プールや海は楽しい反面、油断したり約束を破ったりすると、とても危険な場所であることを伝える。 ● スクリーンを使い、イラストや写真で視覚的に理解を促しながら、約束を一緒に声に出して読む。
● 「プールのうた」を歌う。 ● みんなで掛け声をする。 (挨拶に代えて)	● 友達と声や振付を合わせて活動を楽しむ。 ● 期待感をもって、声を出したり、手を上げたりすることができる。	● 「プールのうた」は、着替えからプール入水までの流れを表す歌詞に、簡単な振付をつけたものである。 ● 「プールのうた」の元曲に親しんでいる空組児童が、みんなの前でモデルを披露しながら行う。 ● 掛け声のリーダーは、6 年生が担当する。



【 成果と課題（主体的・協働的な学びの視点から） 】

- 絵本を用いた導入等の工夫により、児童の注目が集まり、プールへの期待感を高めることができた。単に約束やグループを教員が一方向的に伝えるだけの集まりに比べ、児童は意欲的な態度で取り組み、目標に迫ることができたと考えられる。オリンピックの動画を見せる試みも、予想以上に児童の反応がよく、目標意識や学習の関連性への気付きにつながったのではないかと。
- 絵本を用いた活動、スクリーンで画像や動画を見る活動、体を動かす活動などのバリエーションや順序の工夫により、低学年の児童も 45 分間集中して活動に取り組むことができた。道具・機器類を固定し、児童が移動することで場面を切り替える設定も、集中力や活動への関心を維持するために効果的であった。
- 今回の集会は、扱う内容や時間配分の都合でやむをえない面もあるが、教員主導で行う活動が多かった。高学年児童の役割仕事やモデルとしての活躍場面を随所に盛り込む工夫がさらに必要である。

「集会」授業実践紹介③ 「七夕集会」

実施日時：平成 29 年 7 月 5 日 11:00～11:45 (45 分)

対象児童：小学部 1～6 年 17 名

【 本時の目標 】

- (1) 集団学習の中で、自分の役割や課題に力一杯取り組むとともに、「七夕」「短冊」「織姫」「彦星」などの言葉にふれ、七夕に対する親しみを深める。
- (2) 友達の様子を手掛かりや参考にしながら、大勢の前で、願い事の発表を自分らしく表現する。
- (3) 友達と声や動きを合わせたり、順番を理解して活動をしったりしながら、大勢の友達と一緒に活動を楽しむ。

【 学習活動 】	【 指導内容 】	【 主体的・協働的な学びにつながる主な手立て 】
● 挨拶をする。	● MT に注目する意識や一体感を高める。	● 模倣遊びを通して、MT への注目を高めるとともに、適切な姿勢への意識を促す。
● 教員から七夕に関するお話をきく。	● 七夕、短冊、織姫、彦星などの言葉にふれ、七夕に対する親しみを深める。 ● 友達と声や動きを合わせたり、友達と一緒にロープやボールを使った活動を楽しんだりする。 ● 【6年生】スキットにおいて、状況を考えながら自分の役を演じる。	● 前半は、6年生2名が織姫と彦星役、MT が織姫の父親役を演じ、七夕の由来の一説を紹介する。児童2名は、浴衣や羽衣を付け、本人のモチベーションを高めるとともに、他の児童もイメージをもちやすいようにする。 ● MT は、大好きな人と離ればなれになる気持ちについて、児童に問いかけながら物語を進める。 ● 後半は絵本「たなばたブルびらき」の読み聞かせをする。黄色の長いロープを流れ星に見立てて、全員でロープにつかまって練り歩く。ブルーシートを天の川に、カラーボールを水しぶきに見立てて、自由に遊ぶ時間を設ける。「水でびしょびしょになったから、お掃除しましょう。」という設定で、ボールの片付けも楽しみながらみんなで行く。
● 願い事の発表をする。	● 友達の様子を手掛かりや参考にしながら、大勢の前で、願い事の発表を自分らしく表現する。 ● 適切な態度で友達の発表を見たり聞いたりする。	● 発表する舞台に電飾を用いて、気分を盛り上げる。 ● 発表の手順：担当の6年生がツリーチャイムを鳴らした後に、みんなで次に登場する児童の名前を呼ぶ。→舞台装置の後方から登壇し、願い事を発表する。→笛に短冊をかける。→自分の席に戻る。 ● 児童の実態に合わせて、発表に歌を交えたり、実物や写真カードを用いたりして、表現の仕方を工夫する。また、保護者と書いてきた短冊や、関連する画像などを舞台脇のモニターに映すことで、発表内容の理解を促す。
● 「たなばたさま」を歌う。	● やさしい曲調を意識しながら、友達と一緒に歌うことを楽しむ。 ● 順番やタイミングを意識しながら、曲に合わせてツリーチャイムを鳴らす。	● 願い事発表で6年生が担当したツリーチャイムを見せて、「〇〇君が上手に鳴らしてくれていたツリーチャイム、やりたい人？」と問いかけることで、活動への期待感を高めるとともに、6年生の役割に価値をもたせたい。 ● みんなで「たなばたさま」を繰り返し歌いながら、ツリーチャイムを一人ずつ鳴らす。児童は自分の番が終わったら「どうぞ。」と言って、隣の友達に金棒を渡すようにする。チャイムは MT が持って回る。
● まとめをする。 ● 挨拶をする。	● 友達や自分のうまくいったことを振り返る。	● 6年生の活躍を称えたり、発表の仕方に関するよかった点を共有したりする。



【 成果と課題（主体的・協働的な学びの視点から） 】

- 七夕という題材に合わせて、照明の明るさに変化をもたせたり、電飾を使った舞台装置を準備したり、本物の笹を使用したりすることで、児童の興味・関心を引き出した。また、舞台や笹の配置の工夫により、動線や課題が分かりやすく、低学年でも自ら発表したいという意欲がもてた。
- 読み聞かせだけでなく、衣装をつけた6年生の演技や、体を使った遊びを交えることで、お話の活動を楽しめた児童が多かった。特にボール遊びは、幅広い実態の児童が同時に楽しんだり、様々な友達同士の関わりがもてたりした。
- 上級生から順に一人ずつ発表することで、上級生の様子を参考にしながら、力を発揮できた低学年の児童もいた。
- 本時のような発表の課題において、発語のない児童や声量が小さい児童への支援をさらに充実させたい。
- 願い事は家庭で相談して、短冊に記入する形をとった。児童が実感できる発表内容とするための工夫が重要だと感じた。

「集会」授業実践紹介④ 「絵本集会」

実施日時：平成 29 年 7 月 20 日 9:45～11:00 (75 分)

* 夏季休業前の特別拡大版

対象児童：小学部 1～6 年 17 名

【 本時の目標 】

- (1) 大きな集団の中でも適切な態度で話者に注目し、語りに耳を傾けるとともに、絵本の内容について理解を深める。
- (2) 想像力を働かせて、声を出したり、体を動かしたりしながら、絵本の世界を友達と一緒に楽しむ。
- (3) 様々な絵本の種類や楽しみ方にふれ、絵本を身近に感じ、絵本への興味・関心を深める。

【 学習活動 】	【 指導内容 】	【 主体性・協働性につながる主な手立て 】
<ul style="list-style-type: none"> ● 「えほんのうた」を歌う。 (挨拶に代えて) ● 本時の予定を聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ● MT に注目する意識や一体感を高める。 ● 本時の活動への期待を高める。 	<ul style="list-style-type: none"> ● MT は、図書スペースから、山積みの絵本を台車に乗せて運びながら登場することで、活動への興味を引き出すと共に、図書スペースとの関連付けを図る。 ● 手遊びを交えた歌を通して、楽しい雰囲気の中で、話者への注目を高めると同時に、適切な姿勢への意識を促す。
<ul style="list-style-type: none"> ● 教員らのお話を鑑賞する。 <ol style="list-style-type: none"> ① 「わにわにのおふろ」 ② 「みんなでたいそう」 ＜紙芝居＞ ～マットの片付け～ ③ 「おはよう おやすみ」 ＜布絵本＞ ④ 「みみずのたいそう」 ＜手遊び＞ ⑤ 「おっぱい」 ⑥ 「しろいうさぎとくろいうさぎ」 ⑦ 「かにくんとエビ兄弟」 ＜立体絵本＞ 	<ul style="list-style-type: none"> ● 大きな集団の中でも適切な態度で話者に注目し、語りに耳を傾ける。 ● 絵本の内容について理解を深める。 ● 想像力を働かせて、声を出したり、体を動かしたりしながら、絵本の世界を友達と一緒に楽しむ。 ● 友達と協力をして活動をする(マット運び)。 	<ul style="list-style-type: none"> ● プログラム表には、番号のみを示しておき、進行に伴って、話者名や題材名のカードをはる方式で、期待感を高める。 ● 児童の注目や興味を引くために、多様なお話の形態や楽しみ方をバランスよく構成する。 <p>＜各プログラムの特徴＞</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 【教員A】オノマトペを多用した絵本。 ② 【教員B】紙芝居形式。素足でマット上に立って鑑賞。決まったメロディーに乗せて簡単なフレーズと動作を模倣。 ③ 【図書館司書】布絵本を用いて、動物の目に見立てたボタンのかけ外しを一人ずつ体験。 ④ 【図書館司書】手遊び。 ⑤ 【図書館司書】馴染みの動物が登場する絵本。 ⑥ 【教員C】読み聞かせ後、結婚の話題につなげて、実際に結婚したばかりの教員Cが、自分の式の画像等を提示して、児童に問いかけながら、結婚へのイメージを膨らませることをねらった。 ⑦ 【保護者有志4名】立体絵本(スクリーンにスライドを映しながら、衣装をつけた保護者のオリジナル寸劇)。
<ul style="list-style-type: none"> ● まとめをする。 ● 挨拶をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 好きだった絵本を選んだり、それを発表したりする。 ● 学校図書の貸し出しについて知ったり、夏休みの読書への意欲を高めたりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ● プログラム表を参照しながら、好きだった絵本や、また読んでみたい絵本等を尋ねる。 ● 小学部の図書スペースを紹介したり、夏休み中に、保護者と書店や図書館に行ったり、読書をしったりすることを勧める。



【 成果と課題(主体的・協働的な学びの視点から) 】

- 75 分という長時間の活動だったが、以下のようなプログラムの工夫により、児童の集中力や参加態度は非常に良かった。
 - オノマトペを楽しむ内容のものから、ストーリーのある長めのものまで、幅広い児童の実態を考慮した絵本のチョイス
 - 通常の絵本、布絵本、紙芝居、スクリーンの使用、立体絵本などの媒体の多彩さ
 - 静かに聞く場面と参加する場面のバランス
 - 手遊びや立って体を動かす活動の組み込み
- 図書館司書や保護者の協力により、程よい緊張感や期待感をもてた。
- マットの片付けでは、率先してマットを畳んだり、ペアを組んだり、声を掛け合ったりする児童の姿が見られた。事前にペアを決めておくなど、自発的な関わり合いが見られなかった児童への手立てを検討したい。
- プログラム⑥は、概念的に難しい内容ではあったが、結婚という言葉を身近に感じたり、イメージを膨らませたりするためのきっかけになった。実際の式の画像や話者からの質問内容、数名の保護者の参観なども有効だった。
- 幅広い年齢段階や発達段階の児童を対象とする集団活動として、ふさわしい題材選びや教材研究に引き続き取り組みたい。
- この集会をきっかけとして、「国語」「学級活動」や休み時間をはじめ、多様な場面で絵本に触れる機会を充実させ、自分から進んで、絵本や本を手取る児童を増やしていきたい。好きな絵本が一冊でも二冊でも増えていくことを願う。

「集会」授業実践紹介⑤ 「山登り遠足にいこう集会」

実施日時：平成 29 年 10 月 18 日 11:00～11:45 (45 分)

対象児童：小学部 1～6 年 17 名

【 本時の目標 】

- (1) 体験的な学習を通して、山登り遠足の概要を知り、活動のイメージを深める。
- (2) 想像力を働かせ、バスや山に見立てた道具を使って、活動を楽しむ。
- (3) 友達と声や動きを合わせるなど、進んで友達と協力しようとするとともに、本番に向けた団結を強める。

【 学習活動 】	【 指導内容 】	【 主体性・協働性につながる主な手立て 】
● 挨拶をする。	● 司会や挨拶担当の児童に注目して、話を聞く。	● 6年生O児は司会、P児は始めの挨拶を担当する。
● 山登りのスキットを観る。	● ペープサートや演者に注目して、スキットを楽しむ。 ● 山登りの様子を思い出したり、イメージを深めたりする。	● MTと代表児童1名で、ペープサートを交えたスキットで山登りの様子を表現する。段ボール製の山に見立てた大道具を使用する。 ● スキットは、山登り中に歌をうたうことで友達同士助け合ったり、山頂でおいしくお弁当を食べたりする内容で構成し、児童が山登りに期待感を高められるような工夫をする。また、観ている児童が、手拍子や掛け声、歌などで参加できるように、STがきっかけをつくる。
● 山登り遠足当日のお話を聞く。	● 山登り遠足の概要を知り、当日のイメージを深める。	● スクリーンを用いて視覚的に分かりやすく説明する。 ● まず、昨年度の画像を振り返ることで、児童の興味を引くとともに、これからの活動のイメージをもてるようにする。 ● 本番の日取りや行き先、目標、約束などをクイズ形式で確認する。スキットの内容とも関連をもたせる。 【目標】①みんなで一緒に登る ②困ったときは励まし合う 【約束】①ゆっくり歩く ②ゴミを捨てない ③元気な挨拶
● バス遊びをする。	● バスに乗って遠足に行く姿をイメージする。 ● 友達と協力をして、バス遊びを楽しむ。	● 5年生L児とM児が運転手役を担当する。制帽を被って、バスと一緒に廊下から登場する。 ● 運転手役の誘いに応じて、クラスごとにバスに見立てた段ボールの道具を持って、協力してコースを歩くようにする。
● やまびこ遊びをする。	● やまびこを知り、友達と一緒に声を出したり、ジェスチャーをしたりする。 ● 声の大きさを調整して、「ヤッホー」を言い返す。	● クラスごとに、スキットで用いた山の上に並んで行う。 ● 山側から、大きい声→小さい声→大きい声と、3回「ヤッホー」を言う。他の児童はやまびこの要領で、声の大きさを合わせるように支援する。 ● 「国語・算数」で関連する学習を既に行っていてモチベーションが高い空組が最初、次に星組、最後に一番声量がある海組の順で行う。
● 「やまびこごっこ」を歌う。	● 友達と一緒に歌を楽しむ。 ● お互いの声の大きさを聴き合いながら、歌い方を工夫する。	● 高学年と低学年の2グループに分かれる。対面してお互いの顔が見えるように、各グループ一列横隊で並ぶ。1回目は高学年が先、2回目は低学年が先に交互唱を2回行う。 ● 「やまびこごっこ」は、山登り遠足のために、「音楽」の授業でも事前に学習しておく。
● 挨拶をする。	● 一体感や団結力を高める。	● 6年生Q児が、挨拶を担当する。最後に「がんばるぞ!」「おう!」で士気を高める。



【 成果と課題（主体的・協働的な学びの視点から） 】

- スキットは、ペープサートを取り入れたり、代表の児童が演じたり、手拍子・歌などで参加型の活動にすることで、観ている児童の集中力は高く、その後の活動のイメージをもち、意欲を高めるために効果的な導入であった。
- 当日の見通しをもつことにつながる活動として、バス遊びとやまびこ遊びは有効であった。また、バス遊びでは、上級生と下級生で誘ったり誘われたり、周りの友達と動きを合わせてバスを動かしたり、見ている友達と手を振り合ったり、児童同士の自然な関わり合いが多く見られた。やまびこ遊びでは、相手の反応を期待して、大きな声を出すような様子も見られた。
- 本時のような行事等の事前学習としての「集会」の有効性を再認識した。同等の内容を各クラスで実施するよりも、多様なダイナミックな活動を展開することが可能になり、かつ行事に向けて児童間の団結を強めることも期待できる。

「集会」授業実践紹介⑥ 「もうすぐ「おみせをひらこう」集会」

実施日時：平成29年11月9日 11:00～11:45（45分）

対象児童：小学部1～6年 17名

【 本時の目標 】

- (1) これまでの商品製作について、または、残りの準備期間や当日の抱負などを、大勢の友達の前で発表することができる。
- (2) 友達の商品や発表について、感想を言ったり、応援や称賛をし合ったりする。
- (3) 本番が近づいていることを知ったり、製作から打ち上げまでの関連を知ったりすることで、本番への期待感を高める。

【 学習活動 】	【 指導内容 】	【 主体性・協働性につながる主な手立て 】
<ul style="list-style-type: none"> ● 挨拶をする。 ● カレンダーで、本番の日取りを確認する。 ● 「おみせのうた」を歌う。 ● 「おみせことば」を言う。 ● 教員のスキットを観る。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 「おみせ」本番が間近に迫っていることを感じる。 ● 友達と一緒に、元気に声を出して、「おみせ」の学習への期待感を高める。 ● 「つくる」→「うる」→「たのしむ」の関連についてイメージを深める。 ● 「いっぱいうる」＝「おかねがいっぱい」のイメージをもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> ● O児（6年）は司会、P児（6年）は挨拶、M児（5年）は「うた」、L児（5年）は「ことば」を担当する。 ● 「おみせことば」は、「いらっしやいませ」「おまちください」などの販売活動に必要な7つの表現に、ジェスチャーを合わせたものである。 ● 教員が児童役とお客さん役を演じ、商品の制作から打ち上げまでの流れをイメージできるようにスキットで表現する。「つくる」「うる」「たのしむ」の関連が一目で分かるように場面を設定し、児童が実際に作った商品や当日の衣装（はっぴ）などを用いる。また、進行に伴って各場面に関連する昨年度の取組の画像をモニターに映す。 ● スキットの進行と児童の反応を見ながら、MTは、状況を説明したり、児童に問いかけたりする。 ● 「いっぱい」と「すこし」の理解を促すために、商品とお金の多少を視覚的に示すボードを提示する。 ● 6年生P児が、発表者を呼び出すチャイムを担当する。 ● 発表する場所を明確にしたり、発表するモチベーションを高めたりするために、電飾を用いたゲート付きの発表スペースを用意する。（七夕集会で使用したもの） ● 発表順は、手本となるように海組→空組→星組とする。 ● 海組の発表後、海組がこれまでに製作した全ての商品を机に並べ、他の児童が手に取って見たり、気に入った商品を選んだりする時間を設定する。 ● 発表する児童の手応えとともに、他の児童の見応えとリアクションを想定して、児童の実態に応じた発表の方法を工夫する（マイクの使用、商品の実物・画像パネル・動画の活用、製作・販売の実演など）。 ● 発表内容や経験、自信、緊張などを考慮して、1人、2～3人の小グループ、またはクラス全員で前に出てから一人ずつ発表するなど、発表形態を工夫する。
<ul style="list-style-type: none"> ● これまでの学習の成果を発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 自分が作った商品や、その過程でがんばったことなど、または当日への抱負等を、大勢の前で発表する。 ● 友達の商品や発表について、感想を言ったり、応援や称賛をし合ったりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 6年生P児が、発表者を呼び出すチャイムを担当する。 ● 発表する場所を明確にしたり、発表するモチベーションを高めたりするために、電飾を用いたゲート付きの発表スペースを用意する。（七夕集会で使用したもの） ● 発表順は、手本となるように海組→空組→星組とする。 ● 海組の発表後、海組がこれまでに製作した全ての商品を机に並べ、他の児童が手に取って見たり、気に入った商品を選んだりする時間を設定する。 ● 発表する児童の手応えとともに、他の児童の見応えとリアクションを想定して、児童の実態に応じた発表の方法を工夫する（マイクの使用、商品の実物・画像パネル・動画の活用、製作・販売の実演など）。 ● 発表内容や経験、自信、緊張などを考慮して、1人、2～3人の小グループ、またはクラス全員で前に出てから一人ずつ発表するなど、発表形態を工夫する。
<ul style="list-style-type: none"> ● まとめをする。 ● 挨拶をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 授業を振り返り、満足感や達成感を持ち、本番へのモチベーションを高める。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 時間があれば、参観した保護者の感想を聞く。 ● 6年生Q児が、挨拶を担当する。最後に「がんばるぞ！」「おう！」で士気を高める。



【 成果と課題（主体的・協働的な学びの視点から） 】

- 発表のテーマが、思い入れのある商品等のこれまでに一杯取り組んできた内容であったため、「見てもらいたい」「伝えたい」という意識が高く、それが、発表時の堂々とした態度や積極性につながったと思われる児童が多くいた。
- 一人ひとりに応じたバリエーションに富んだ発表方法が効果的であった。高学年では、自分でタブレット（動画）を操作したり、記録表を提示したりしながら、各自の商品製作における目標に照らして、成果を発表することができた。得意な作業を実演した児童も、大勢の前で披露できてよい表情を見せた。複数名で前に出て発表することで、大勢の前でも普段の力を発揮することができた児童もいた。
- 星組の実演では、一人ひとりの机の前に各自のめあて（文章とイラストのシンボル）を貼りだした。そして、実演を録画して、その動画を参照しながら、取組を振り返った。本人と観る側双方が、めあてを共有するための工夫として有効であった。しかしながら、めあての本質的な理解を促す支援方法（教員の橋渡し）の検討は、今後の課題である。

IV まとめ

今年度は、昨年度に引き続き、活躍をキーワードに、「活躍場面省察会議」や「集会」の授業づくりを通して、小学部段階における学習評価の可能性を探ってきた。「できた」、「もっとやりたい」、「見て見て」を大切にしてきた活躍場面には、自己評価（「できた」と感じる）と他者評価（他人から認められること）が未分化な段階であること、また他者に依存せず自律的な評価につなげるために観客型や同僚型の活躍や役割意識の位置付けの重要性について確認することができた。活躍場面と評価場面は密接な関係であることを理論的に説明できたことは大きな成果と言える。これらを受けて考えた自己評価・他者評価の力につながるプロセスの仮設モデルは成果と言えると同時に、今後は検証していく必要がある。

研究方法2では、一人ひとりが活躍する「集会」における授業づくりを通して、主体的・協働的な学びを育む授業のポイント作成を行った。年間を通して、同一題材はなく、レパートリーに富んでいたため、数としては少なかったが、それでも今回整理した5つのポイントは、どれも重要で、今後の集会における授業づくりでも十分反映させられると考える。ただし、今年度は「集会」に限定したため、今後は他の授業にも活用できる汎用性の高いものに整理していく必要がある。表4のキーワードを手掛かりとしたい。

今後も「活躍」を小学部の特徴的な実践として継続していきたいと考える。活躍場面を充実させることで、児童たちが小学部段階で、どれだけ自己評価・他者評価する力を身に付けていくかを数年単位で見していきたい。

（文責：柴田）

引用・参考文献

東京学芸大学附属特別支援学校（2016）研究紀要 第61号

Bates, E., Canaioni, L. & Volterra, V. 1975 The acquisition of performatives prior to speech. *Merrioll-Palmer Quarterly*, 21, 205-226

「集会」学習指導案

日時：平成30年1月26日（金）10:00～10:50

場所：小学部プレイルーム

対象：小学部1～6年生 計17名

低学年ほし組5名（男子3名、女子2名）

中学年そら組6名（男子4名、女子2名）

高学年うみ組6名（男子5名、女子1名）

指導者：小島啓治（MT） 柴田琢磨（ST1） 吉田友紀（ST2）

加藤夏奈（ST3） 會澤加奈子（ST4） 仲野真史（ST5）

坂詰健司（ST6） 池田菜緒（ST7） 松本直巳（ST8）

1. 題材名 「学発練習はじまるよ集会」

2. 題材設定の理由

本授業「集会」は、今年度新設された小学部合同で行う授業である。本校における「5つの支援区分」のコミュニケーション支援の内容を主に扱う授業である。学習指導要領においては、自立活動の「3 人間関係の形成（1）他者との関わりの基礎に関すること。（4）集団への参加の基礎に関すること。」「6 コミュニケーション」、生活科の「遊び」「役割」に関する内容、国語科の「聞く・話す」に関する内容などから構成されている。

「集会」のテーマは、（1）「七夕集会」「お正月集会」といった風物詩や年中行事に親しむもの、（2）「ダンス集会」「絵本集会」といった余暇活動につながるもの、（3）「プールはじまるよ集会」「もうすぐ山登り遠足集会」といった行事等の事前事後学習の役割を果たすもの、の3つに大別される。本校小学部が目指す「教科横断的な学習の構成」の視点において、「集会」は各授業や行事をつなぐ中核的な授業であると言える。また「集会」は、学校生活に潤いやメリハリをもたらしたり、小学部集団の行動規範や価値基準を形成・共有したり、教員が学年の連続性や段階性を再認識したりする役割も備えている。

本題材では、2月に実施される全校行事「学習発表会（以下「学発」）」を扱う。「学発」では、体育館ステージで大勢の観客を前に、各クラスが一年間の学習の成果を盛り込んだ劇仕立ての発表をしたり、会のオープニングとして「音楽」の授業で取り組んだ合奏を小学部全員で披露したりする。多くの児童が、発表内容や衣装など、また当日の舞台上で演技を披露することに期待感を抱いている。題材名にある「学発練習」とは、当日までの約一か月間ほぼ毎日「学発」という授業枠を設け、演技の練習を中心に、選んだり、教員や友達と相談したり、取組を振り返ったりする活動や、舞台道具・背景の一部を製作する活動に取り組む期間である。

本校小学部は、2学年の複式学級が3学級で構成され、どの学級にも幅広い発達水準の児童が在籍している。高学年学級「うみ組」は、仲間意識がとても強い学級である。これまでの「集会」においては、司会役やお手本役を担当してきており、大勢の友達の前で上級生としての役割意識が高まってきている。中学年学級「そら組」は、友達への関心が高く、高学年の友達をモデル視したり、低学年の友達の頑張る様子を積極的に応援しようとしたりする姿が多く見られる。低学年学級「ほし組」には、初めて体育館ステージで舞台発表をする1年生3名を含む。「集会」の流れや様々な行事への見通しをもちにくい低学年であるが、上級生の姿を手掛かりとしたり、上級生からの応援を受けたりすることで、参加態度が向上し、大勢の友達との活動を楽しめるようになってきた。

「集会」では、上級生の児童に、それぞれの長所や特性に応じた会の運営を担う役割や、モ

デルとして活躍できる場面を設定し、自己有用感や役割意識の高揚をねらっている。そして、上級生の主体的な取組を促進すると同時に、他の児童の学習課題への理解を助け、さらには規範意識を高めたり、下級生が上級生に憧れをもったりすることを期待している。小学部では、昨年度から「活躍」を研究のキーワードとしてきた。児童が「できた」「見て、見て」「もっとやりたい」と感じる確かな手応えと、その時の周囲のリアクションを大切に、児童一人ひとりの「活躍場面」の充実を図ってきた。このリアクションとは、単に拍手やハイタッチなどの表現方法ではなく、発表する児童の行動に期待感を抱いたり、共感したりすることで生まれる眼差しや表情なども含む全体的なムードを意味する。そして、この「活躍場面」を充実させることが、自己評価・他者評価を可能とする力を涵養することや、主体的・協働的な学びの充実につながると考える。本題材では、参加の平等性や活動の同時性も考慮してダイナミックな活動を展開する中で、児童の実態に応じた「活躍場面」を盛り込んだ。大別して①昨年度の取組を思い出して実演する、②「舞台発表のめあて（児童向けには「学発の目標」）」を、身体表現を通して意識する、③これまでに取り組んできた発表内容の一部を大勢の前で披露する、④発表内容の一部を、「めあて」を意識して表現をする、⑤「めあて」の視点をもって、友達の演技を振り返る、という活躍場面を設定した。一人ひとりの児童が力一杯自分の役割を果たすことで、集団全体として「学発」に向けての期待感や一体感を高めたい。そして、本題材および今後の「学発」の学習過程を通して、友達との様々な活動を楽しみ、自分から進んで友達に関わろうとしたり、友達同士で力を合わせ、学び合いながら、よりよいものを目指したりする児童・学部集団になってほしい。

3. 目標

- ① 集団の中で、自分の課題や役割に力一杯取り組みながら、「学発」の概要や学部共通の「めあて」についての理解を深める。
- ② 「学発」のイメージを深める過程で、自分の発表への周囲のリアクションを感じたり、「めあて」を意識して表現したり、「めあて」に照らしながら友達の表現を振り返ったりする。
- ③ 「学発」に向けての期待感や一体感を高めるとともに、集団の活動に進んで参加する態度や役割意識を養う。

4. 指導計画 本時 18/21 時間

* 本題材は 1 単位時間の計画である。以下には参考までに集会の年間計画を示す。

回	実施日	集会名	概要
1	4/12	はじめましての会	1 年生のことを知る。小学部の友達を知る。
2	4/19	春レク始まるよ集会	春のレクリエーション大会について知り、期待感を高める。小学部の一体感を高める。
3	4/25	歓迎遠足に行こう集会	歓迎遠足について知り、期待感を高める。
4	5/10	音楽集会	音楽を媒介として、仲間と触れ合う。
5	5/17	ダンス集会	様々な種類のダンスを体験する。ダンスを媒介として、仲間と触れ合う。
6	6/7	学校にとまろう、始まるよ集会	宿泊学習について知り、期待感を高める。
7	6/28	プールが始まるよ集会	プールでのきまりやグループを知る。プールでの学習への期待感を高める。
8	6/30	体育集会	体育的な運動やゲームを媒介として、仲間と触れ合ったり、協力したりする。
9	7/5	七夕集会	友達と一緒に七夕に親しみ、活動を楽しむ。願い事を友達の前で発表する。
10	7/20	絵本集会	様々な絵本に触れることで、お話の世界観を楽しむ。
11	9/6	お兄さん、お姉さん先生、よろしくね集会	教育実習生の好きなことや、得意なことについて知り、親睦を図る。

12	10/18	山登りに行こう集会	山登り遠足について知り、期待感を高める。
13	11/8	もうすぐ「おみせをひらこう」集会	「おみせをひらこう」が近づいていることを感じ、期待感を高める。この時点までの製作活動について、友達の前で発表をする。
14	11/16	「おみせをひらこう」まとめの会	「おみせをひらこう」の成果や達成感を共有し、打ち上げへの期待感をもつ。
15	12/4	もうすぐ「連合運動会」集会	連合運動会について知り、期待感を高める。小学部の団結を高める。
16	12/20	お楽しみ会	一年間の出来事を振り返る。友達と一緒に出し物や歌、ゲーム等を楽しむ。
17	1/11	お正月集会	新年の始まりを意識し、新年の抱負を発表する。
18	1/26	学発練習始まるよ集会	「学習発表会」について知り、期待感を高める。
19	2/20	学発まとめの会	「学習発表会」の成果を発表したり、お互いに称賛し合ったりする。
20	3/5	卒業遠足に行こう集会	卒業遠足について知り、期待感を高める。卒業に向けて心の準備をする。
21	3/14	6年生を送る会	卒業生、在校生共に感謝の気持ちを伝え合い、よい思い出をつくる。

5. 本時の学習

1) 本時の目標

- * 本題材は1単位時間のみの実施であるため、前述の「3. 目標」で示す目標と同様である。
- ① 集団の中で、自分の課題や役割に力一杯取り組みながら、「学発」の概要や学部共通の「めあて」についての理解を深める。
 - ② 「学発」のイメージを深める過程で、自分の発表への周囲のリアクションを感じたり、「めあて」を意識して表現したり、「めあて」に照らしながら友達の表現を振り返ったりする。
 - ③ 「学発」に向けての期待感や一体感を高めるとともに、集団の活動に進んで参加する態度や役割意識を養う。

2) 個人目標 【個人目標☆、手だて○（個別教育計画に関連した目標★、手だて●）】

- * 本研究授業では、対象児童数が多いため、中心的な活動場面における目標であり、「活躍場面」と関連が深い「本時の目標②」に関してのみ、個人の实態に応じた目標や指導の手だてを設定し、授業研究会での協議の柱としたい。「本時の目標①③」に関しては、全児童共通の教材や指導の手だて（「5-4」本時の展開）に記す内容）、および日常的に個人の学習特性に応じて用いている言葉掛けや指さし、モデリング等の支援をもって目標達成のための手だてとする。

児童	実態	個人目標	指導の手だて	関連する個別教育計画の目標
A 1年 男子	・教員と「泣く」「笑う」の表情をして楽しむ。 ・前に出て発表する友達を見て「自分も（やりたい）」と言って要求することが増えてきた。	☆④「泣く」「笑う」と分かる表情をみんなの前で堂々で行う。	○事前学習でパネルを使った、大げさなジェスチャーを取り入れたりしながら、楽しく練習に取り組めるようにし、自信をつけるようにする。	
B 1年 男子	・集団の前に立つことが苦手である。自分の好きなことや自信のあることを活動に取り入れることで意欲的に取り組むようになってきた。「ヤッホー」は秋の遠足単元から楽しんでいる活動である。	☆みんなの前で①「ヤッホー」と発表して成功経験を積む。	○事前練習で楽しめる雰囲気の中で取り組めるようにし、見通しと自信をつけて本番に臨む。	

C 1年 男子	・特定のフレーズを覚えて、復唱することが得意である。また、すべての場面で静止することがやや苦手であるが、授業の挨拶をしたのちは、静止できる場面が増えてきた。	☆③自分で5秒間数えて、「ピタッと」止まる。	○事前学習で、「気を付け」の姿勢で制止しながら、教員と一緒にゆっくりなテンポで数唱し、姿勢及びリズムの定着を図る。	
D 2年 女子	・楽器が好きで、弾きたいとき自分から楽器に近づき音色を楽しむ。称賛された時に笑顔になることがある。	☆弾きたい楽器を選んで演奏を楽しみ、周囲のリアクションに気付く。	○音を鳴らして注意を引き、自分から楽器に近づいたり手を伸ばしたりできるようにする。発表後、近くにいる教員が大いに褒める。	
E 2年 女子	・休み時間に昨年度のお気に入りの場면을再現して楽しむ。達成感のある場面で友達にタッチを求める。	☆選んだポーズをみんなの前で発表し、発表後友達に称賛を求める。	○発表するポーズの選択肢にお気に入りのものを含める。発表の場面で発表を見る友達の表情が本人から見えやすいようにする。	
F 3年 男子	・友達の頑張りを「すごい」などと称賛することは多いが、具体的な内容に基づいて評価することは少ない。	★「表情」の視点に基づいて、上級生のダンスの良かった点を伝える。	●本児自身も、授業前に表情の変化を意識して役割演技をする練習を行う。	・目標への取組について、大人との対話を通して適切な評価ができる。
G 3年 女子	・粗大運動を得意とし、クラスの友達の前では堂々と発表することができる。大集団の中では、緊張が高まり、十分に力を発揮できないことがある。	★みんなの前で、堂々と大きく体を伸ばしたり、曲げたりすることができる。	●事前にクラスの友達の前で、集会で発表する体操を披露する場を設ける。また、その様子の動画を観て振り返ることで、自信をもって発表することを促す。	・自分の意思を相手に伝えることを増やす。
H 3年 女子	・達成感のある場面で周囲の人の表情を窺い、期待したリアクションが得られると嬉しそうな表情をする。	☆みんなの前で発表し、発表後称賛を期待して周囲の人の表情を見る。	○発表を見る周囲の人の表情や発表後の周囲のリアクションが本人から見えやすいようにする。	
I 4年 男子	・合奏では小太鼓を担当し、一定のテンポで太鼓を叩く課題に取り組んでいる。大集団の中では緊張が高まり、十分に力を発揮できないことがある。	★曲の最後まで、音楽に合わせて小太鼓を演奏する。	●同じリズムで演奏をする児童3名でグループを構成する。事前に反復練習をして、自信をつけておく。集中度に応じて、うなずくジェスチャーと指さしで支援をする。	・友達と一緒にできることを増やす。
J 4年 男子	・友達の良い所に言及することは多いが、友達が何か頑張ったことに対して称賛することは少ない。	★「表情」の視点に基づいて、上級生のダンスの良かった点を伝える。	●ダンスの発表中、カメラやタブレットで動画や写真を撮り、それらを活用しながら、感想を言えるようにする。	・目標への取組について、大人との対話を通して適切な評価ができる。
K 4年 男子	・大勢の前で大きな声で発表できることが増えてきているが、促されないと声が小さくなることも多い。	☆クラスの演目を大勢の前で大きな声で発表する。	○自発的に大きな声をだしやすいように、最初に「じゃーん」と言うってから発表するよう促す。	

L 5年 男子	・ダンス課題に大変意欲的に取り組んでいる。自分なりのイメージをもちながら、動作に合わせた表情作りを試行錯誤している。	☆動作と表情のイメージをつなぎながら、ダンス練習の成果を力一杯発表する。	○各動作に「助けて」「逃げろ」等のイメージしやすい名称をつける。本人が表現しようとする意欲を大切にしながら、表情を鏡で確認しながら、事前の練習を重ねる。	
M 5年 男子	・歌やダンスが大好きである。表情の細かな表現は、まだ難しいが、口を開く・閉じるなどを意識して踊れるようになった。 ・発表時、隣の友達が気になり、横を向く傾向がある。	★前半は、口を結ぶことを意識しながら、正面を見て堂々とダンスの発表をする。	●友達の取組を見て参考にしたり、自分の表情を動画に撮って振り返ったりしながら、事前の練習を重ねる。発表直前に、他の児童や参観者によく表情を見せるように伝える。	・放課後に家庭で取り組める活動を増やす。
N 5年 男子	・大きな集団の活動に慣れ、今年度になって、集会に時間一杯参加できるようになった。周りの友達の行動を手掛かりに活動できる場面が増えてきた。	☆落ち着いて参加し、曲の後半に、連続してシンバルを鳴らす。	○事前に反復練習をして、課題に慣れておく。両隣に同じリズムで演奏する友達を配置する。集中度に応じて、視線での合図→指さし→手拍子のジェスチャーなどの支援をする。	
O 6年 女子	・失敗や負けることが苦手だが、落ち着いて対処できる場面が増えた。自分の取組を「△」や「×」と言える場面も増えた。	★ダンスの発表後、表情の変化の視点で、自分の取組を振り返る。	●事前に表情の解説ボードを参照しながら練習を重ねる。友達の感想や友達が撮った画像等を参考に自己評価できるようにする。	・セルフマネジメントのスキルを養う。
P 6年 男子	・集団への適応力が高まってきた。衝動性が高いが、明確な課題には、集中できる時間が伸びてきた。 ・様々な場面で、手元を見ることを課題にしている。	☆音楽に合わせて、順番通りにトライアングルとベルを演奏する。	○楽器を持ったり叩いたりする部分にマークや厚みをつけたり、卓上を構造化したりする。必要なジェスチャーを決めて一貫性のある反復練習をしておく。	
Q 6年 男子	・踊ることが大好きである。振付は確実に覚えたが、表情の意識は、まだ難しい。クラスでの練習後、「どう？」と自発的に教員のコメントを求めるようになった。	☆ダンスの前半と後半で表情を変えて踊り、発表後「どう？」と他者の感想を聞く。	○前半の表情は、鎌倉大仏の学習で親しんでいる「お口は、むっ」をキーワードとして練習を重ねておく。発表後、静寂を保ち、「どう？」という発言の自発を待つ。	

3) 準備物

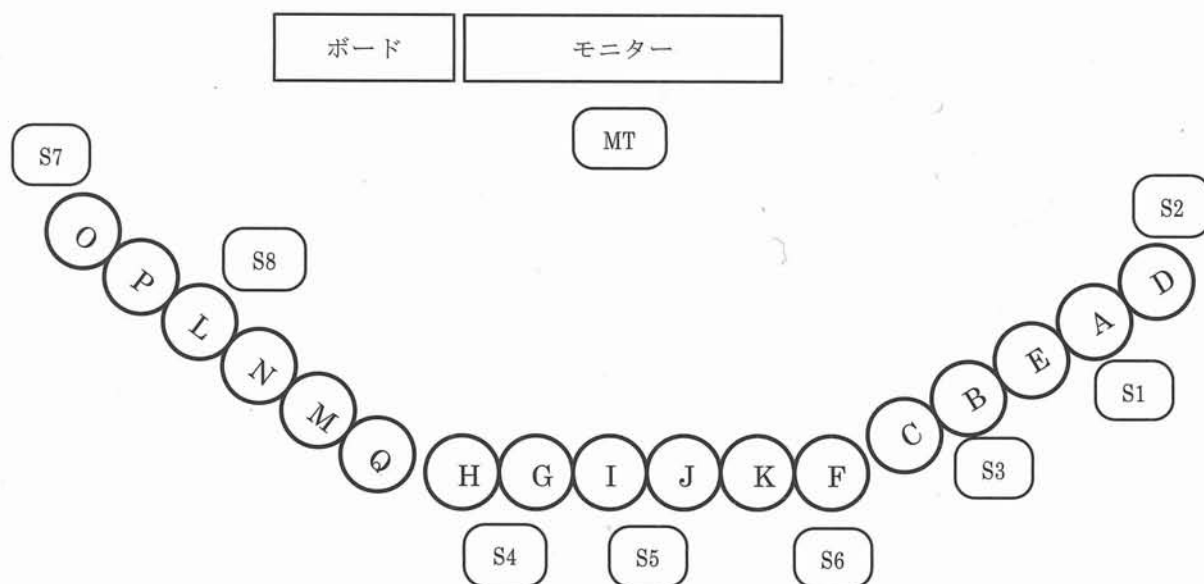
児童用イス (17)、本時のプログラム、小太鼓とスティック、ホワイトボード (2)、大きい布、集会ポスター、差し棒 (2)、ピアノ、ミニピアノ、ツリーチャーム、まねっこどんどんのポーズの画像パネル (2)、まねっこどんどん用マット (3)、模造紙大カレンダー (1・2月分)、学発カード (カレンダーに貼り付け)、本番までの日めくりカウントダウンカレンダー、演目名パネル (4)、舞台発表のめあてパネル (4) とパネル立て掛け用コーン (4)、リーダー用ビブス (4)、学発体操の音源、ダンスの音源、スピーカー、カメラ (2)、ダンス解説ボード、シンバル、トライアングル、デスクタイプベル (4)、野菜型マラカス (人数分) とかご (2)、ギター、おわりの言葉ボード、TVモニター、タブレット端末 (2)

4) 本時の展開

時配	学習活動	指導内容	留意点
3	<ul style="list-style-type: none"> ○ 集合を確認する。 ○ 始めの挨拶をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 前で話したり発表したりする児童や教員に注目する意識を喚起する。 ○ 「学発」に関する集会が始まることが分かり、活動への期待感を高める。 ○ 【LMP】友達と協力して、タイミングを合わせながら活動をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 司会は児童Oが担当する。Oには、まず「みなさん」と言って全員の顔を端から端まで見てから話すようにする（この活動以降も同様）。直前に教室で、ST8が説明して試しておく。 ○ Oの台本を兼ねて、児童が見通しをもてるように本時のプログラムを掲示しておく。 ○ 日常でペアを組むことが多いバディであるLとPが、始めの言葉を担当する。MTは2人の自発的な関わりを支える最小限の支援をする。 ○ Mはドラムロールを担当する。 ○ Pが布を取り去ると、本集会のポスターが現れるようにする。ポスターのタイトルの文字をLとPが棒で差しながら、みんなで声を合わせて集会名を言う。 ○ ST6は、ホワイトボード、ドラム、差し棒等の準備・片付けをする。
8	<ul style="list-style-type: none"> ○ 昨年度の「学発」の動画・画像や実演を見る。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 昨年度の発表を思い出し、本時の学習へのモチベーションを高める。 ○ 思い出したことや感想などを、言葉にしたり、指をさしたり、発表を再現したりして表現する。 ○ 【DEH】昨年度演奏した楽器やお気に入りの場面を選び、大勢の前で実演する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 昨年度の本番（オープニングと各クラスの4演目）のダイジェストを3分程度にまとめておく。 ○ MTは、児童の反応を見ながら、内容に関して対話をしながら進める。STは、児童の小声での発言や視線を細かに観察しながら、注目したい言動は全体の話題に上げる。（この活動以降も同様） ○ ダイジェスト鑑賞中に、モニターの近くに移動したり、立ち上がって発表を再現したりする児童がいる場合、STは安全面の確保に努め、着席にとらわれなくてよい。 ○ Dには、楽器の実物を2種類、EとHには、画像パネル2枚の選択肢として提示する。 ○ EとHの実演の際には、他の児童が「まねっこどんどん、まねっこどんどん」と声を合わせて言えるように教員がきっかけやモデルを示す。 ○ ST6とST7はツリーチャイム・ピアノやマットの準備・片付けをする。 ○ モニターとタブレット端末・PCの操作は、ST6が担当する。 ○ ST4は、Dの実演の際にピアノ伴奏を担当する。
4	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「学発」の日付や「学発練習期間」を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「学発」の日取りや「学発練習期間」の日数を知る。 ○ 友達と声を合わせて数えたり、指で数字を表したり、カレンダーに注目したりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 通常うみ組で児童が作製し、使用している模造紙大カレンダーの1・2月分を提示する。日取りは、まず児童に尋ね、正解が出ない場合は、MTが伝える。その後、代表の児童が、カードを2月18日の枠内に貼る。 ○ カレンダーを使って、Qが本番までの平日のみを棒で差しいき、それに合わせてみんなで日数を数えるようにする。同時に、モニターに大きく数字も表示していく。数えた後に、用意しておいた本番までのカウントダウンめくりカレンダーを提示し、玄関に掲示しておくことを伝える。めくり係をNにお願いする。 ○ ST6とST7は、カレンダーや差し棒の

			準備・片付けをする。また、カレンダーやモニターの角度を微調整する。
4	○ 今年度の演目について、MTの話聞く。	○ 自分のクラスの演目が分かり、他のクラスの演目について知る。 ○ 【K】大勢の前で、堂々と演目を発表する。	○ MTは、モニターに動画や画像を示しながら、簡単に内容を紹介する。各演目紹介の最初に、当該クラスがタイトルを言ったり、代表者がパネルをMTに持ってきたりする。
4	○ 舞台発表のめあてを確認する。 * 児童向けには「 <u>学発の目標</u> 」という表現を用いる。これ以降、本指導案でも同様の表現を用いる。	○ 声を合わせて「学発の目標」を言ったり、決まったジェスチャーで表現したりする。	○ 以下の4点を「学発の目標」のキーフレーズとし、各目標を記したパネルを提示する。 ①「大きなお口、声を合わせる、ヤッホー」 ②「大きな動き、伸ばす・曲げる」 ③「ピタッと止まる、1、2、3、4、5」 ④「表情、泣く・笑う」 ○ 各目標に上級生のリーダーを1名ずつ配置する。リーダーはLMOQの4名の中から、希望を聞き、授業当日までに決定する。リーダーはビブスを着用する。 ○ ST6とST7は、パネルとそれを立て掛けるコーンの準備・片付けをする。
8	○ 「学発体操」をする。 ①グループ練習 ②代表者の発表 ③全員で通し	○ リーダーの児童に注目しながら、「学発の目標」を言ったり、体を動かしたりする。 ○ 友達の良い所に気付いたり、友達の発言や動きを参考にしたりしながら活動をする。 ○ 【ABCG】「学発の目標」を意識しながら、練習の成果を、大勢の前で堂々と発表する。 目標①：B、目標②：G 目標③：C、目標④：A	○ 「学発の目標」のキーフレーズとそれに対応した動作を音楽に乗せて構成した「学発体操」を用いる。事前に「朝の運動・マラソン」の時間に導入しておく。 ○ 「学発の目標」の4つの内容のうちの1つを取り出してグループで活動をする。所属グループは、児童の実態と本人の希望をすり合わせて事前に決めておく。 ○ グループに分かれた活動では、ST2がDに帯同し、その他のSTは、児童の分布に応じて担当を決める（現時点では未定）。 ○ ST6は、体操の音楽の機器操作をする。
9	○ 今年度の取組の途中経過を発表する。(代表7名) ①うみ組のダンス ②全員合奏の打楽器グループ	○ 【LMOQ】「学発の目標」の「④表情」を意識して、ダンスをする。 ○ 【FJ】「④表情」の視点に基づいて、ダンスの発表の感想をみんなに伝える。 ○ 【INP】「学発の目標」の「①音をあわせる」を意識して、大勢の前でも落ち着いて活動をする。 ○ 「学発の目標」の視点を持ちながら友達の発表を観て、応援したり称賛したりする。	○ 代表して、うみ組が劇中で踊るダンスの4名と、オープニングの合奏の高学年打楽器グループの3名が、これまでに取り組んできた経過を発表する。 ○ ダンスの前半と後半で表現する感情・表情が変化することを記す解説ボードを提示する。 ○ ダンスの発表中、FJは、カメラやタブレット端末で動画や写真を撮り、それらを活用しながら、感想を言えるようにする。 ○ INPの演奏後、他の児童が、席を離れて3人の近くで称賛したり、ハイタッチしたりできるように、STがきっかけをつくる。 ○ ST6とST7は、楽器や解説ボード、タブレット端末の準備・片付けをする。ST6はタブレット端末等のモニターへの接続や児童が操作する際の補助をする。
10	○ まとめをする。 ○ 「うみのうた」を歌う。 ○ 挨拶をする。	○ 授業を振り返り、満足感や達成感をもち、今後の取組につなげる。 ○ 学部全体の一体感や団結力を高める。 ○ 授業の終わりを意識する。	○ 参観者の代表2、3名に、授業の感想・評価をお願いする。目標に照らした簡潔なコメントを頂けると有り難い。 ○ 歌う前に、野菜型マラカスの入ったかごを回して1人1個ずつ選んでいく。 ○ 隊形は特に指示せず、上級生のリーダーシップと雰囲気任せ。 ○ ST6は、ギターで伴奏をする。 ○ 挨拶はQが担当する。挨拶の最後に「がんばるぞ!」「オウ!」で士気を高める。

(1) 配置図 (基本ポジション)



(1) 個人目標の評価

児童	個人目標	評価	コメント
A	☆④「泣く」「笑う」と分かる表情をみんなの前で堂々で行う。	○	
B	☆みんなの前で①「ヤッホー」と発表して成功経験を積む。	○	教員と一緒ににこやかに発表できた。
C	☆③自分で5秒間数えて、「ピタッと」止まる。	○	児童○を手本にして取り組めた。
D	☆弾きたい楽器を選んで演奏を楽しみ、周囲のリアクションに気付く。	○	拍手をもらう時、観客をじっと見ていた。
E	☆選んだポーズをみんなの前で発表し、発表後友達に称賛を求める。	○	参観の保護者に賞賛を求めて手を振った。
F	★「表情」の視点に基づいて、上級生のダンスの良かった点を伝える。	○	
G	★みんなの前で、堂々と大きく体を伸ばしたり、曲げたりすることができる。	○	
H	☆みんなの前で発表し、発表後称賛を期待して周囲の人の表情を見る。	○	恥ずかしくて友達の顔は見られなかったが、達成感は感じていた。
I	★曲の最後まで、音楽に合わせて、小太鼓を演奏する。	○	
J	★「表情」の視点に基づいて、上級生のダンスの良かった点を伝える。	○	教員の質問を受けて表情を答えることはできた。
K	☆クラスの演目を大勢の前で大きな声で発表する。	○	
L	☆動作と表情のイメージをつなぎながら、ダンス練習の成果を力一杯発表する。	○	
M	★前半は、口を結ぶことを意識しながら、正面を見て堂々とダンスの発表をする。	○	
N	☆落ち着いて参加し、曲の後半に、連続してシンバルを鳴らす。	○	若干泣く場面もあったが、課題には集中して取り組めた。

O	★ダンスの発表後、表情の変化の視点で、自分の取組を振り返る。	○	
P	☆音楽に合わせて、順番通りにトライアングルとベルを演奏する。	○	
Q	☆ダンスの前半と後半で表情を変えて踊り、発表後「どう？」と他者の感想を聞く。	○	

(2) 授業の評価

項目	評価内容	評価	コメント
目標	1. 本時の目標は達成できたか。	○	
	2. 本時の目標は適切であったか。	○	
活動	3. 本時の目標にあった学習活動であったか。	△	目標には適していたが、活動の種類が多かったかもしれない。
手だて	4. 教材は適切であったか。	○	「学発体操」の考案により、楽しみながら効率よく、目標を達成できた。
	5. 教材の提示方法は適当であったか。	○	
	6. 教材の使い方は適切であったか。	○	
	7. 教示方法は適切であったか。	○	
	8. 児童への援助方法は適切であったか。	○	
	9. 集団の統制は適切であったか。	○	年齢・理解力の幅が広い対象集団であったが、それぞれの活躍できる場面を盛り込みながら、全体の目標に迫ることができた。
	10. 児童の反応の捉え方は適切であったか。	○	児童の視線や体の動き等をつぶさに観察し、適切な促し方や待ち方ができた。
TT	11. 教員間の役割分担とその連携は適切であったか。	○	
学習環境	12. 時間配分は適切であったか。	○	
	13. 場面の設定は適切であったか	○	もう少しスペースがほしいが、体育館では広すぎる。

(3) 個別教育計画運用の評価（短期目標のみ）

児童	個別教育計画からの目標	個人目標達成度評価	場面の適切性評価	手立ての適切性評価	次時への課題	個別教育計画への課題
F	・目標への取組について、大人との対話を通して適切な評価ができる。	○	○	○		
G	・自分の意思を相手に伝えることを増やす。	○	○	○		
I	・友達と一緒にできることを増やす。	○	○	○		
J	・目標への取組について、大人との対話を通して適切な評価ができる。	○	○	△		
M	・放課後に家庭で取り組める活動を増やす。	○	○	○		

(4) 指導計画の評価

題材名：「学発練習はじまるよ集会」 総時間数：1時間 授業日：平成30年1月26日（金）		
指導形態に関して	指導内容に関して	時間数に関して
学部全員で取り組むことで、効果的・効率的に目標に迫ることができた。児童の実態や課題に応じて、一緒に発表する人数や、誰と（教員と、慣れた級友と、先輩と）発表するか等を効果的に組み合わせることができた。	「学発体操」は、目標を達成するために大変効果的であった。友達の発表を撮影してふりかえる活動では、視点をより明確にして、全員に分かりやすく伝えるための教具の工夫が必要であった。	適切であった。若干慌ただしかったので、2時間に分ける可能性も考えられる。（①前年度のふりかえりと今年度の演目発表、②「学発のめあて」の確認と途中経過の発表）